

# 兄の声

小川未明

青空文庫



おかあさんは、ぼくに向か<sup>む</sup>つて、よくこういわれました。

「小さい<sup>ちい</sup>ときから、おまえのほうは、気が強<sup>きつよ</sup>かったけれど、に  
 さんはおとなし<sup>ちい</sup>かった。まだおまえが、やつとあるける時<sup>じぶん</sup>分のこ  
 と、ものさしで、にいさんの頭<sup>あたま</sup>をたたいたので、わたしがしかる  
 と、いいよ、武<sup>たけ</sup>ちゃんは、小さい<sup>ちい</sup>のだものといつて、にいさんは、  
 おこりはしな<sup>ちい</sup>かった。ほんとうに、がまん強<sup>つよ</sup>い子<sup>こ</sup>でした。」

ぼくは、そうきくと、物<sup>もの</sup>心<sup>ごころ</sup>のつかない幼<sup>よう</sup>時<sup>じ</sup>のことだけれど、  
 なんとなく、いじらしい兄<sup>あに</sup>のすがたが目に浮<sup>う</sup>かんで、悲<sup>かな</sup>しくなる  
 のです。

兄<sup>あに</sup>が召<sup>しょう</sup>集<sup>しゅう</sup>されてから、後<sup>のち</sup>のことでした。

えんがわに、兄あにのはいていたくつがかわかしてありました。まだ落おとし残のこされたところがついています。朝晩あさばん、兄あには、このくつをはいて、通勤つうきんもすれば、また会社かいしゃの用事ようじで、方々ほうほうをあるきまわったのでした。ときどきは、映画館えいがかんの前まえにも立たてば、喫茶店つさてんへも立たちよつたでありますよう。なにしろ、かけがえのくつを持たなかつたから、かかとはへるにまかせて、いたんでいました。もつとも、一度ど、街頭がいとうで朝鮮人ちようせんじんのくつなおしに裏うらが皮わをとりかえさせて、月げつき給ゆうのほとんど全部ぜんぶを払はらわせられたことがあります。考えかんがれば、このくつには、兄あにのふんできた生せい活かつの汗あせがにじんでいるのでした。形かたちがいびつとなつて、ところどころ穴あながあいているのも、心こころなしにながめることは、できませ

ん。

兄あにのところへ、友ともだちが、たずねてくると、しぜんと生せい活かつの感想かんそうや、世せ間けんの様よう相そうが話はになしのぼりました。兄あにのこれらの意い見けんも、このくつをはいて、あるくうちに得えられた体たい験けんでありましよう。

兄あには、こういうのでした。

正しょう直じきで、しんせつで、謙けん遜そんな人ひとというものは、たとえ、

はじめてあつた人ひとでも、もうこれまでにいくたびもあつたことがあるような、なつかしきをおぼえるものだ。

「あなたとはいつかどこかでお目めにかかったことがありませんね。」と、ききたくなることがある。そんなときは、しいて自じ制せいしながら

ら、

「なんで、そんなことがあるものか。きちがいでないかぎり、だしぬけに聞きかれるものではない。」と、自じ分ぶんをしかるのだ。

また、こんなおかしなことを空くう想そうすることもある。

「もしかすると、前ぜん世せにおいて、出であつた人ひとかもしれないぞ。」と。

「いや、まったく、ばかげきつた話はなしですが、世よの中なかに善ぜん良りな人間にんげんほど、相あ手いてを感かん激げきさせるものは、ありません。」と、兄あには、いふのでした。すると、兄あにの友ともだちは、

「そうですか。そういういい人ひとと、どこで、おあいなされましたか。」と、かならず問とうのであります。

兄は、友だちに、

「わたしは、社<sup>しゃ</sup>用<sup>よう</sup>で、方<sup>ほう</sup>々<sup>ぼう</sup>の会<sup>かい</sup>社<sup>しゃ</sup>や、工<sup>こう</sup>場<sup>じょう</sup>を訪<sup>ほう</sup>問<sup>もん</sup>し  
ます。そして、い<sup>にん</sup>く人<sup>じん</sup>となく情<sup>じょう</sup>味<sup>み</sup>のゆたかな人<sup>ひと</sup>たちと出<sup>で</sup>あいま  
した。ところがふしぎに、それが門<sup>もん</sup>番<sup>ばん</sup>とか、受<sup>う</sup>付<sup>つけ</sup>とか、地<sup>ち</sup>位<sup>い</sup>  
の低<sup>ひく</sup>い人<sup>ひと</sup>々<sup>びと</sup>にかぎっていました。さもなければ、大<sup>たい</sup>衆<sup>しゅう</sup>食<sup>しょく</sup>  
堂<sup>どう</sup>の前<sup>まえ</sup>へならぶような人<sup>ひと</sup>々<sup>びと</sup>であります。それらの人<sup>ひと</sup>たちとは、  
顔<sup>かお</sup>を見<sup>み</sup>たさいしよから、なんでも心<sup>こころ</sup>のうちを、う<sup>き</sup>ちあける気<sup>き</sup>持<sup>も</sup>ち  
になれば、また一<sup>ほん</sup>本<sup>ぽん</sup>のたばこを分<sup>わ</sup>けあつたこともめずらしくあり  
ません。なにがそうさせるのか、とにかく、この苦<sup>く</sup>痛<sup>つう</sup>の多<sup>おほ</sup>い世<sup>よ</sup>の  
中<sup>なか</sup>で、こ<sup>ひと</sup>うした人<sup>びと</sup>々<sup>びと</sup>の存<sup>ぞん</sup>在<sup>ざい</sup>は、ど<sup>ん</sup>んなにな<sup>な</sup>ぐさめとなること  
でしょう。わたしは、会<sup>かい</sup>社<sup>しゃ</sup>の内<sup>うち</sup>にいるときより、外<sup>そと</sup>を出<sup>で</sup>あるく

ときのほうが愉快なものも、そのためです。」と、語るのでした。

「じゃ、社内の空気が、おもしろくないのですか。」と、友だ

ちは、きくのであります。

「考えてごらんなさい。命令と服従しかないところに、い

つたい、なごやかさなどというものがありませんか。」と、兄

は、答えました。

兄は、おだやかな性質であつたけれど、だれに対しても、正

直に思ったことを話しました。ことに友人に対しては、す

こしもかくしだてすることはなかつたのです。兄は、会社で、

上のものが権力によつて、下のものをおさえつけようとする

のを見て、なにより不愉快に思つたらしいのでした。



「課長は、いつも、こわばった顔かおをしているが、家いえへかえつて、細君さいくんや、子どもたちにも、あんな目めつきで、ものをいうのだからか。」と、さもまじめに、考かんがえていたこともありません。

また同僚どうりょうが、むやみと上役うわやくに対して、機嫌きげんをうかがうのを軽蔑けいべつしながら、

「公用こうようと私用しりようを一つにするばかもないものだ。自分じぶんからこのんで、奴隷どれいになろうとしている。」と、歎息たんそくしていたこともありません。

よく重役じゅうやくが、買出かだしや、家事かじの雑役ざつえきなどに、社員しゃいんを使用しりようすることがありますが、兄あには、けっしていかなかったばかりでなく、そんなひまがあるときは、映画えいがを見みたり、レコードをき

いたりしたものでした。

あるとき、ぼくが、

「にいはさんは、いつも音楽をきいたあとで、どんな空想をなさいますか。」と、きいたことがある。ふだんから、美と平和を愛する兄であるのを知っていたけれど、こうした場合に、希望や、空想が、どんな形であらわされるだろうかと思つたからです。

兄は、遠くを見るような目つきをして、

「そうだな、いい音楽をきいたときだね。」といつて、考えました。

「美しい、絵のようなけしきが、目に浮かんでくるよ。」

「どんなけしき？ 現実でなく、架空な、未来の世界とでもい

うのですか。」

「いや、そんな空虚くうきよな夢ゆめではない。たとえば、赤い夕空あか ゆうぞらの下したに、工場こうじょうの煙突えんとつがたくさんたっている、近代的な街きんだいてき まちの風ふう景うけいとか、だいたい色の太陽いろ たいようが燃える丘おかに、光線こうせんの波なみうつ果か樹園じゆえんとか、さもなければ、はてしない紺碧こんぺきの海うみをいく、日にっし章旗しようきのひるがえる商船しょうせんとか、そんなような、清きよらかで、朗ほがらかなうちにもさびしい、けしきが目に浮うかぶのだよ。」と兄あには、  
 いったのでした。ぼくは、  
 「にいさん、そうした美うつくしさなら、いくらもあるけしきじやありませんか。」と、いったのです。  
 兄あには、じつとぼくを見て、

「ただわたしがそういつただけでは、わからないだろう。なるほど外観がいかんからいえば、この種しゆの街まちや、工場こうじやうや、農園のうえんは、絵えとして見みても、手近てぢかなものであるにちがいない。問題もんだいは、その町まちや、村むらで働むらいている人ひとたちのことだ。わたしが、これまであつた、あのような、謙虚けんきよで、正直しやうじきで、しんせつな人ひと々びとが働むらいているということではなければならぬ。かりにそうしたどうしの集あつまりだと想像そうぞうしてごらん。日々ひびそこでいとなまれる生活せいかつこそ、どんなにか、楽たのしかろうじやないか。そこには、暴ほう力りよくや、権けん力りよくをもつ人間にんげんもなく、すべてが理解りかいと同情どうじやうとで、協き力りよくしあうのだからね。」といいました。

そうきくと、たとえ、経けい験けんのとぼしいぼくでも、そして、ま

た深いことはわからぬけれど、そうした社会が平和で、真に住みよいところであるということだけは、さとれるのでした。

兄がいなくなつてから、家の中は、急にさびしくなりました。

そして、はやいく日か、たつたころ、母はひとりごとのように、「ゆうべ、あの子が特攻隊へはいつた夢をみたが。」といつて、ふさいでおられました。

だから、ぼくは、

「にいさんにかぎつて、特攻隊などへ、入りませんよ。」と、うち消して、無理にも母を元気づけようと思いました。しかし、母は、いつまでも気にかかるのみえて、それから後も、家の中は、

なんとなく、うすぐらいような日ひがつづきました。

ところが、まったく突然とつぜんでした。それが、おどろきでもあり、喜びよろこでもあったのは、兄あにが帰かえってきたことです。

ある日ひ、だれか玄関げんかんへきたようなけはいがしたので、姉あねが出てみると、立たっていたのが兵隊へいたいすがたの兄あにだったので、姉あねは、びつくりして、

「まあ、義よしちゃんなの？ お母かあさん、義よしちゃんが帰かえってきました

よ……。」と、さげんだ。その声こゑをきいて、母ははも、ぼくも、ころげるようにとびだしました。兄あには、泣ないているのです。

「さあ、早はやくお上あがり、どうしたの。」と行って、母ははも泣なきました。

「にいさん、なにか変わつたことがあつたの？」

ぼくは、いままで兄の泣いたのを見たことがなかつたのと、もし出征すれば、おそらくふたたび見られないだろうと思つていたので、ついこうききました。姉も、

「義ちゃん、どうかしたの？」といつて、兄の顔をのぞくようにしました。

兄は、あとから、あとから、目にあふれ出る涙を、手の甲でふきながら、頭を左右にふつて、

「みんなの顔が見られて、うれしいのだ。」と、わずかに答えたのです。

「こつちへ、あがつてから、ゆっくりお話しなさい。」と、母は、

て手を引かんばかりにして、兄あにがくつのひもとくのも、もどかしげに見守みまもつていました。

「にいさん、もういかなくてもいいの。」

「いまなん時じだね。晩ばん方がたまでに、こちらを出でて、隊たいへかえらなければならぬ。」

兄あには、あいさつが終おわると、これまで、自分じぶんが勉べん強きやうをしたり、レコードをかけたりした、へやへいきました。家いえのものは、その後のちも、兄あにがいるときと同じおなように、そうじはするけれど、だれも、手てをつけようとしなかったので、本箱ほんばこのなかも、たなかぎりも、兄あにが出でていったときのままとなっていて、すこしも変かわっていませんでした。



兄は、さもなつかしそうに、あたりを、見まわしていました。

それから、いつもそうしたように、好きなレコードをかけました。

がいこくもの

外国物では、アベリマリアとか、粗朴ながら、血のつながり

あいしゆう

に、哀愁をもよおす日本の俚謡などを兄は、このみました。

よし

「義ちゃんが、ずっとこうして、家にくれたらいいのにね。」

あね

と、姉はそばに立ち、鼻をつまらせていました。

はな

「じきにかえつてきますよ。そうしたら、もうどこへもいきませ

ん。」と、兄は、答えました。

あに

こた

「お母さんが、心配していらつしやるから、きつと無事に帰つ

かあ

しんぱい

ぶじ

かえ

てね。」

ばんがたちか

晩方近く、小雨の降るなかを、兄は、隊へとかえりました。

こさめ

ふ

あに

たい

みんなが、門口かどぐちまで見送りみおくに出ると、ふりかえって拳手きよしゆの礼れいを残のこして去さりました。

「あんまり思いがけなかったので幽霊ゆうれいかと思おもったわ。」と、姉あねはへやへもどると、母ははに話はなしていました。

「公こう用のついでとかいいいますが、よく寄よってくれましたね。」と、母ははは、目めをしばたいていました。

しかし、それきり、兄あには家いえへ帰かえらなかったのです。やはり特とつこ攻隊うたいはいに入はいっていたのでした。あとで、このことも知しったのですが、兄あにはあのととき、いとまごいのつもりできて、わたしたちに気きづかれぬように、アルバムから、父ちちと母ははの写しゃ真しんをはいで持もつていきました。

戦争中、特攻隊が、よく出発前、別れのことばを放送して故国にのこしたことがあります。地域の関係からか、兄はこれに加わらなかつたのです。しかしながら、ぼくは、現在でも、道があるいているときとか、またぼんやり空想にふけつているときとか、そんなようなときに、どこからともなく、兄の声をきくことがあります。

ことにさんらんとして夕焼けのする晩方などに、あぎやかといつてもいいくらい、はつきりと、なつかしい兄の声をきくことがあります。

「おまえは、真に自由と、正義と、平和のために、生命のかぎりをつくせ！」と。

それは、<sup>みじか</sup>短い<sup>しやうがい</sup>生涯<sup>であつたけれど、</sup>美<sup>び</sup>と平<sup>へい</sup>和<sup>わ</sup>をこのうえな  
く愛<sup>あい</sup>した兄<sup>あに</sup>として、こういつて、ぼくをはげましてくれるのは、  
まことに、<sup>とうぜん</sup>当然<sup>おも</sup>のことと思<sup>おも</sup>われるのであります。

## 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「赤い雲のかなた」小峰書店

1949（昭和24）年1月

初出：「子供の広場」

1946（昭和21）年4月

※表題は底本では、「兄《あに》の声《こえ》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2018年5月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 兄の声

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>